北海道
日伊協会会報

VOL. 58　2017年10月
発行　北海道日伊協会
事務局　〒060-0051 札幌市中央区
南１東２　ブライトサッポロ内
電話(011)241-0345 FAX (011)241-0567

創立 25 周年の
アルテピアッツァ美唄

蝶々夫人　舞い降りる

プッチーニ・フェス主演　ロンバルディさんが特別コンサート

何もなかった故郷の炭鉱閉山跡地に、イタリア在住の彫刻家・安田侃さんがアルテピアッツァ美唄をつくり始めてから 25 周年を迎え、10 月 14 日と 15 日、イタリアのプッチーニ・フェスティバルの『蝶々夫人』で主役を演じたドナータ・ダヌンツィオ・ロンバルディさんの特別コンサートが開かれました。イタリアの歌姫は、アートスペースの高い天井に艶のある圧倒的な歌声を響かせ、両日とも隙間なく入った約 300 人の聴衆から熱烈な拍手をあびました。

このコンサートが実現するまでの歩みと感激を、安田琢さん（当協会理事）に綴っていただきました。

熱唱するロンバルディさん。背景に安田侃さんの「蝶々夫人」舞台美術

プッチーニ財団との出会い

安　田　　琢

安田侃彫刻美術館アルテピアッツァ美唄に、プッチーニ・フェスティバル財団（以下プッチーニ財団）より25周年へのお祝いが届きました。それも最高に華やかなお祝いが。2012 年と 2016 年のプッチーニ・フェスティバルで披露された『蝶々夫人』で「蝶々さん」役を演じたドナータ・ダヌンツィオ・ロンバルディさんが駆け付け「プッチーニ『蝶々夫人』のゆうべ」で歌ったのです。

安田侃とプッチーニ財団の出会いは 1999 年。トスカーナはルッカ市にあるマッサチュッコリ湖畔で行われた安田侃彫刻展がきっかけでした。マッサチュッコリ湖は、美唄市の宮島沼と同じ国際的に重要な湿地に与えられるラムサール条約登録湿地で、豊かな自然に囲まれた風光明媚な場所です。

その自然は、126 年前も変らなかったのでしょう。ジャコモ・プッチーニが趣味の狩猟を楽しむために、湖畔の町トッレ・デル・ラーゴにヴィッラを購入しました。そこにプッチーニは 30 年間住み続け、数々の名作を作りました。『蝶々夫人』もその一つです。現在、町の名前がトッレ・デル・ラーゴ・プッチーニに改名され、ヴィッラがプッチーニ博物館になり、プッチーニはそこに眠ります。1930 年、プッチーニに捧げる音楽祭、プッチーニ・フェスティバルが始まり、生誕 150 年の 2008 年には 3400 人収容の野外劇場が新築されました。

話を 1999 年に戻します。7 月と 8 月の2ヵ月間、世界中からオペラファン、プッチーニファンが集まるフェスティバルに、オペラの新しい試みを模索していた財団が、同じトスカーナのピエトラサンタで制作活動をしている安田侃に彫刻展を開くよう声をかけました。劇場の周りに展示された大型の白大理石作品4点が好評を博したことから、財団は次の年に行われる『蝶々夫人』の舞台美術を担当しないかと安田侃にオファーを出したのです。　（2 ページへ続く）

「蝶々夫人」の夕べ
オペラ鑑賞ツアー

北海道日伊協会は10月 14 日アルテピアッツァ美唄で開かれた「プッチーニ『蝶々夫人』のゆうべ in アルテピアッツァ美唄」初日に札幌から鑑賞バスツアーを組み参加しました。

この日の演奏曲目は、プッチーニの歌劇『蝶々夫人』から「変わらぬ愛を」「ある晴れた日に」「私の坊や」など。ロンバルディさんは、背景にフェスティバルの安田侃彫刻舞台を映し出した本番を思わせる雰囲気の中で、蝶々夫人の愛と悲しみを、時に激しく時には消え入るように歌い上げました。鑑賞席にはジョルジョ・スタラーチェ・イタリア大使ご夫妻、イタリア文化会館のパオロ・カルヴェッティ館長ご夫妻，高橋幹夫美唄市長らの姿も。“世界一の歌姫”に酔いしれたひと時でした。

ツアーはパークホテルの協力で実現しました。24 人が参加、車中で三部会長による「プッチーニ・オペラミニ解説」を聴き、演奏会気分を盛り上げました。

イタリア大使ご夫妻、イタリア文化会館館長も鑑賞

（1 ページから続く）容易に応えられるものではないオペラの舞台美術ですが、安田侃は熟考の末、引き受けます。自分の抽象彫刻が「蝶々さん」の精神を表現できると信じて。

演出家、財団と激論をかわしながら、できる限りミニマムな舞台に仕上がった「蝶々夫人」は、2000 年 7 月に初演が行われました。彫刻家に舞台美術を任せる「オペラを彫る」シリーズの先駆けは大成功を納め、財団からプッチーニ特別賞が贈られました。

翌年の 2001 年、「日本におけるイタリア年」を機に東京、神戸、長崎で引っ越し公演が行われると、以降、ドイツはヴィースバーデン、アメリカはボルチモア、愛知万博、韓国はソウルなどでも披露されていきます。特に「蝶々夫人」の舞台である長崎公演は、グラバー邸でパーティーが開かれ、RAI 国営放送が取材に入るなど、イタリア人にも思い出に残る公演となりました。

このように、プッチーニ財団と彫刻家安田侃のジャンルを超えた関係は、年月を経て深まります。そして、2017 年 10 月、アルテピアッツァ美唄にソプラノが舞い降りることになったのです。

（NPO アルテピアッツァびばい理事）

谷古宇教授のサローネ・ディタリア

「アンギアーリの戦い」の謎

道立近代美術館で「レオナルド・ダ・ヴィンチと アンギアーリの戦い展」の開催に合わせて7月8日、札幌グランドホテルで谷古宇尚・北大大学院文学部教授（新会員）によるサローネ・ディタリアを開きました。テーマは「アンギアーリの戦いの謎 美術における“競作”と“戦闘図”の伝統」。2 度目の講演です。

「アンギアーリの戦い」は、フィレンツェ市庁舎の 500 人広間の壁画として着手されたが完成することなく、ジョルジョ・ヴァザーリの壁画で隠された。下絵と相当数の模写が伝えられ、今回のメーン展示《タヴォラ・ドーリア》はその軍旗争奪場面の“傑作”。

谷古宇さんは、戦闘場面で槍が立ち並ぶ背景、馬に踏みつけられる兵士などの情景はローマ時代から描かれていると例示。手前の後ろ向きの 2 頭の馬の尾が渦巻いて描かれていることに注目し、レオナルドは、伝統を引き継ぎながら、ここに 3 次元の激しい動きの新しい表現を生み出したのではないか、と解説しました。

さようなら マリアーノさん

キタラ 18 代オルガニスト

大澤あすか

当協会主催の送別会。マリアーノ さんを囲んで別れを惜しむ

イタリア人で初めてのコンサートホールキタラ第 18 代専属オルガニスト、ダヴィデ・マリアーノさんが 1 年の任期を終えて離道することになり、8 月 18 日、お別れの演奏会が開かれました。

オルガンソロでは珍しく、会場はたくさんのお客様で溢れていました。フェアウェルにふさわしく技量の高い曲を選び、自由でオリジナリティあふれる装飾と、絶妙な強弱と間合い、そして華がある技巧。今回も全曲暗譜で、この 1 年で磨かれた成果を示し、圧巻でした。

した。

お披露目演奏会などキタラで聴いた即興性ある華やかな技巧は、バッハが好む演奏だろうと感じたことを思い出しました。北 1 条教会やローズガーデンクライスト教会の演奏会では、教会のオルガンがこんなにも豊かに鳴り響くのかと驚いたものです。

コンサート後の北海道日伊協会主催送別会では、とてもほっとされ、あの優しい笑顔を見せていました。

親しんだ演奏を身近に聴けなくなるのは、1ファンとしても大変寂しいですが、世界のオルガニストとして大きく羽ばたいていかれることでしょう。

（オルガニスト、法人会員ブライトサッポロ）

井関正昭先生の思い出

喜井豊子

2009年の3月だったと思う。私の研究している未完の「M.C.エッシャーとジャポニスム」を送った。先生の『イタリア.わが回想』の感想を添えて。しばらくして、「完成させなさい。ジャポニスム学会なら紹介出来るから」と手紙がきた。はっきりとこう言って応援して下さる方は、初めてだった。論文は先生のおかげでジャポニズム学会誌に掲載された。2010年3月学会の総会に上京して、庭園美術館を訪ね井関館長に初めてお会いした。背が高く、白黒の大柄のチェックの上着に黒のパンツでかっこよかった 。丁度「マッキアイオーリ展」を開催していて、4万人の来訪者で大成功していた。フィレンツェのアカデミアの大先輩グループが始めた印象派で、フランスの印象派より早く活動していたことを知り驚いた。先生の著書『イタリアの近代美術』は読んでいたが、日本初の美術学校、工部美術学校に絵画を教えに来た、イタリア人のフォンタネージを調べようと本を検索して、『画家フォンタネージ』井関正昭著とあり、腰が抜けるかと思うほど驚いた。

2012年出版社から、『近代美術点描 』が送られて来た。2013年「点描」に書かれていたチビタヴェッキアを訪ねた。長谷川路可の《26人の日本人聖人》の壁画のあるマルテッロ ジャポネーゼ。支倉常長が伊達正宗の親書を持ちチビタヴェッキアからイタリアに上陸して丁度400年の年だった。イタリアから葉書を出した。イタリアに行きたいと書いた葉書が来た。北海道にも来たがっていた。

昨年上京したとき、庭園美術館を訪ねた。木曜日しか見えていないと言われてお会い出来なかった。今年3月イタリアとオランダの帰りに 4 日間東京に滞在したのに忙しすぎて帰札してしまった。実は、先生が最初に仕事をした鎌倉の神奈川県立近代美術館通称カマキンで、1953年8月から9月にかけて「現代オランダ版画展」が開かれ、M.C.エッシャーの版画が日本初上陸している。ジェノバのキョッソーネ美術館の浮世絵の事も詳しかった。井関先生は恩人である。エッシャー研究はもう少しで完成する。1930年にローマで開催された「日本美術展」をもう少し掘り下げ、完成した絵巻物を先生の墓前にお持ちする事を励みに前を見つめる。本当に有り難うございました。ご冥福をお祈り致します。

（元会員、革絵作家） 12 ページ参照

札幌文化芸術劇場　こけら落とし『アイーダ』の指揮者

バッティストーニさんが初のお目見え

来年 10 月オープンする札幌文化芸術劇場のこけら落とし公演の指揮者に抜擢されたアンドレア・バッティストーニを迎えて、プレイベント札幌交響楽団コンサートが 9 月 15 日コンサートホールキタラで開かれ、そのダイナミックな指揮ぶりで満員の聴衆を沸かせた（**次ページ参照**）

提供 市民交流プラザ開設準備室

ヤマザキマリさんとトーク

もう一つのプレイベント、札幌育ちの漫画家ヤマザキマリさん（元北海道日伊協会事務局）とのトークはよく16 日、札幌パークホテルで開かれ、こちらも 300 人収容のホールは満席。二人は文化と芸術について縦横に語り合いました。その要旨を紹介します。通訳は当協会会員の石田咲子さん。

札響に雪玉を投げかける　バッティストーニ

劇場はお風呂よりすごい　ヤマザキマリ

日本とイタリア

バッティストーニ（写真㊧）　誰にでも親切な日本人の国民性はイタリア人と違うが、美に対する考え方には共通したものがある。
歌舞伎に関しては、シーンに喜怒哀楽のテーマを設け、音楽に合わせて気持ちを伝えるというところは、オペラとの共通点を感じた。

ヤマザキ（写真㊨）　体を洗うだけでなく、浴槽に浸かってリラックスするのは、古今東西古代ローマと日本くらい。現代のイタリア人はシャワー浴びるだけ。
イタリアでは言葉で言わないと生き残れない。それを知ってこんなに前に出るようになった。

札響とオペラ

バッティストーニ　オペラの主役は歌い手。歌い手がいかに歌いやすく演奏するかが大切で、実践を積むことでオーケストラも学んでいく。オペラの演奏で求められる柔軟さが、結局交響曲を演奏する際役に立つ。
自分が札幌でオペラを指揮するという事は、小さな雪玉を投げかけるということ。その雪玉が転がり大きくなってくれる、そのような事を期待している。

ヤマザキ　札響の演奏者だった母に学校を休んでつい行ってグリーンコンサートを聴いた。初めて聞くオーケストラの生演奏に目を丸くした人たちを間近に見た。その本物への渇望が、キタラから文化芸術劇場へと飽くなき前進を実現させたのだと感じる。

バッティストーニ　子供の頃、ピアニストだった母から強制的にチェロを練習させられ苦痛だった。しかし、青春時代にベルリオーズの幻想協奏曲を聞いて、まるで恋に落ちるような感覚を得た。芸術の力は、それに触れた時に、ああ、皆が同じ苦しみ、感情をもって生きているんだ、ということを解らせるところにある。

札幌文化芸術劇場

バッティストーニ　劇場ができるという事は、学校を持つような事。古代ギリシャ、ローマ時代でも同じで、いろんなシーンから、主人公たちの気持ちを汲み取ること。古代、劇場に足を運ぶことは聖なるところに行くことで、人々はそこで哲学や常識を学んでいった。

ヤマザキ　ギリシャ、ローマ時代の倫理の学校、教養の学校が 2000 年の時を経て札幌に受け継がれるわけで、お風呂以上にすごい。

『アイーダ』について

バッティストーニ　こけら落としに相応しいオペラ。1800 年代のオペラの2つの基本を押さえている。◆オペラの壮大さ、エジプトの力をみせるオーケストラ、合唱、ダンスを使った演出◆3 人の登場人物の現代にも通じる人間ドラマ。芸術家にとって、芸術はナルシシズム的な喜びを感じつつ、人々にも同じ喜びを与えるものだ。（一番好きなオペラはという質問に）『トゥーランドット Turandot』だ。

ヤマザキ　『テルマエロマエ』の映画は、のだめカンタービレと同じ監督で、アイーダの楽曲がたくさん使われた。古代の壮大さと人間のドラマ性にマッチした。